

第70回日本小児保健協会学術集会 シンポジウム3

「日本小児保健協会の魅力を再発見し未来へつなげる
—若手会員とともに学会活動を考えよう—

若手による小児保健検討委員会の発足と取り組みについて

中山 祐一 (若手による小児保健検討委員会委員長, 大阪公立大学大学院看護学研究科)

1. 本シンポジウムの目的と概要について

本シンポジウムの目的は、①若手による小児保健検討委員会（以下、若手委員会）が実施した会員ニーズ調査の結果報告と若手委員会の活動の紹介を通じて、さまざまな世代の協会員と小児保健および本協会の魅力を再発見すること、および、②協会活動の更なる活性化や小児保健の魅力を効果的に発信する方策について検討すること、の2点である。

本シンポジウムの構成は、若手委員会の発足の経緯と活動内容の紹介、そしてシンポジウムの聴衆との討議である。以下、若手委員会の発足経緯と活動内容、および、本シンポジウムの討議を通して検討された小児保健の魅力とそれを発信する方策について記載する。

2. 若手委員会の発足の経緯について

若手委員会の発足は、2018年9月に理事会からの要請に基づき、「若手による小児保健に関するミーティング」が開催されたことに始まる。ミーティング開催にあたり、各地方の担当理事が、小児保健に関して活発な意見交換や意欲的に活動することが期待される若手会員を1名ずつ推薦し、若手会員が招集された。このミーティングでは、若手会員の新規獲得、多職種連携の促進、新たな活動や課題へ取り組む体制づくりなど、日本小児保健協会の活動の更なる活性化に対する検討が行われた。このミーティングを契機として、2019年には準備委員会が設けられ、2020年6月に若手による小児保健検討委員会が発足することとなった。

3. 若手委員会の目的と活動内容の紹介

1) 若手委員会の目的と全体の活動内容について

若手委員会は、以下に示す4つの目的のもと活動を展開している。

1. 10年後に予測される小児保健上の課題を推測し、その課題に取り組む若手育成
2. 魅力的な学術集会開催を通じた若手会員の獲得
3. 多職種で子どもの問題に取り組むこと
4. 多職種で議論する場の仕組み作りの場

これらの目的を達成するために、我々は、年3回の定例会に加えて、3つの小グループに分かれて活動している。発足当初（任期1期目）の若手委員会の活動体制を図1に示す。委員会が発足した頃は、若手委員会内で当委員会の強み、活動の方向性など、活動体制を確立させるための討議を何度も重ねた。その結果、小児保健上の課題に関する興味関心が共通する委員毎に小グループを編成し、活動を展開することになった。2期目となった現在では小グループを3つに編成し、理事2名、委員19名で活動を展開している。委員の構成は小児科医、歯科医師、助産師、看護師、心理士など多職種にわたる。

定例会では、各グループの取り組みの進捗報告を行っており、毎回多角的視点からグループの活動に対して相互にフィードバックを行い、活動の評価を行っている。同じ職種からは得ることができない視点に気づくことができることは、多職種が関与する「小児保健」で活動する魅力のように感じる。

また、各グループはそれぞれテーマを掲げており、

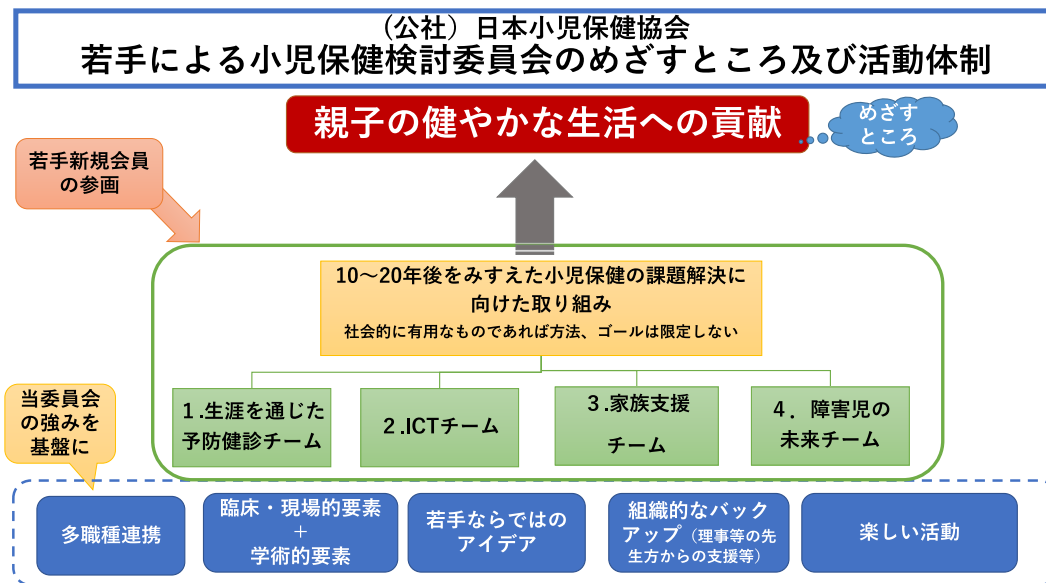


図1 発足当初の若手委員会の活動体制

「小児保健の魅力を上げる方策の検討」, 「小児保健におけるICTの活用」, 「障害児の未来」のテーマに取り組んでいる。我々が継続して取り組んできた具体的な活動の1つに若手企画シンポジウムの開催がある。若手委員会の各グループが企画を練り, 2020年度から複数の若手企画シンポジウムを開催してきた。各シンポジウムでは, 10年後に予測される小児保健上の課題を見据え, さまざまな分野で先駆的に取り組まれている演者を招き, 小児保健上の課題解決のための方策について議論を深めてきた。それぞれの講演内容に関しては, これまでの若手企画シンポジウムの講演録を是非とも参照されたい¹⁻¹⁴⁾。

2) 小グループ「小児保健の魅力を上げる方策の検討グループ」の活動の紹介

ここでは著者が所属する「小児保健の魅力を上げる方策の検討」をテーマにした小グループの活動について紹介する。なお, 他のグループの活動内容については, 中井委員, 木村委員の講演録を参照されたい。

「小児保健の魅力を上げる方策の検討」のグループは小児科医, 歯科医師, 看護師, 社会福祉関係者で構成されている。当グループは, 若手会員の獲得を目指し, 次世代に向けた, より一層魅力的な協会活動について議論を重ねてきた。2018年の「若手による小児保健に関するミーティング」では, 若手会員の育成に関する議題があがり, 若手会員の獲得と育成は将来の協会活動だけでなく, 子どもたちの健康を保持増進す

るエビデンスの創出につなげるための重要な方策である。そのため, 若手委員会の活動目的にも, 若手会員の獲得や育成の内容が明記され, 「小児保健の魅力を上げる方策の検討」グループでは, この目的を達成するための方策をどのように創出するかが議論の中心になっている。

議論の中で, 「若手会員を獲得するには, 小児保健の魅力伝えることが必要ではないか?」, 「小児保健の魅力の可視化や伝え方はどのような方法があるのか?」, 「小児保健協会の強みや弱みは何か?」, などをグループ内で協議してきた。その中で, 若手育成および会員獲得の方策に取り組む前に, まずは本協会の会員が小児保健の魅力についてどのように考えており, どのようなニーズを抱いているのかを把握することが必要ではないかという提案がされた。その後, 2023年1～2月に全会員を対象とした会員ニーズ調査を実施し, 調査結果が出たので本シンポジウム内で報告を行った。調査には多くの協会員から回答を得ることができ, 協会員が捉えている小児保健の魅力について明らかになった。調査結果の詳細については, 草野委員の講演録と今後発信する調査報告書を参照されたい。

4. 小児保健の魅力とその発信のための方策

1) 本シンポジウムにおける聴衆との意見交換

本シンポジウムの後半には, リアルタイムアンケート「imakiku」を用いて, 聴衆と小児保健の魅力とその発信方法について意見交換を行った。リアルタイム

アンケートの参加人数は 35 名が参加し、「あなたが思う小児保健の魅力について教えてください」、「小児保健の魅力の発信方法について、アイデアがあれば教えてください」の 2 点質問した。

2) 協会員から見た小児保健の魅力について

以下、シンポジウムの聴衆との意見交換から得られた意見について報告する。小児保健の魅力として、「多職種連携」、「子どもと家族の多様な段階に関わることができる点」が挙げられた。また、日本小児保健協会の魅力についても意見を得ることができ、「医療・福祉・社会とバランスが良い点」、「実践に活用できる点」が挙げられた。

聴衆は、「多職種で共通した課題に取り組むこと」、「様々な視点から意見を得ることができること」を小児保健の魅力として捉えていた。また、「強みの異なる専門職がつながり、子どもと家族へ学際的にアプローチできること」も小児保健の魅力として捉えていた。この学際的なアプローチは、医療、教育、福祉、社会の各分野が連携したアプローチを指し、子どもたちとその家族の健康や幸福を支える上で非常に重要な取り組みである。また、「子どもの現在、未来、将来を含めて関われること」、「子どもと家族のいろいろな予防段階に関われること」など、子どもと家族の多様な段階に関与できることも小児保健の魅力として捉えていた。

また、日本小児保健協会の魅力については、「日本小児保健協会の学会プログラムの内容は、医療、教育、福祉、社会のバランスが良い」との意見があり、これは協会の活動が医学的・臨床的な側面だけでなく、社会的な側面や福祉的な側面も網羅しており、多様な方面に活動を拡げていることが協会の魅力であることを示唆している。小児保健の活動が、さまざまな専門職との協力や連携に基づいて展開されることで、現代社会の複雑な課題に対処する手段となり、より包括的なケアや支援を提供できることにつながると考える。小児保健が、子どもたちや家族の健康を維持・増進するポテンシャルを有していることが、協会の活動の魅力へとつながっていると考えられた。

他の意見では、「子どもと家族に関する未来の課題や、課題解決のための方法論、そして多角的な視点に気づくことができる」、「実践に活用できるセミナーがある」、「最新の情報を得ることができる」などがあり、

協会員は協会主催の活動に参加することによって自身の成長を感じ、自己成長につながる活動を協会の魅力として捉えていた。

3) 小児保健の魅力の発信について

聴衆から得られた発信方法のアイデアとして、「大規模多施設コホート調査における協会の支援」や「多領域でアプローチした介入研究の実施と成果の発信」などの学術的なアイデアから、「小児保健チームを結成し各職域の学会に乗り込む」、「公式キャラクターの導入」など、斬新なアイデアを得た。また、小児保健の魅力を発信する手段として、デジタル媒体やソーシャルメディアを活用することが重要であるとの意見も得た。他にも子ども向けアプリの開発など、小児保健の対象者たちへの発信に関する意見も得ることができた。その他、相談ツール、公式 SNS の設置など、多様なアプローチ方法が提案された。すでに協会は公式 LINE を運営しており、著者も協会の活動情報を即時に得ることができていると感じている。聴衆から提案のあったアイデアは、小児保健の魅力を多様な手法でアピールし、多くの人々に本協会の活動内容を届けるための興味深い提案であった。

5. 若手委員会の活動の展望と今後の役割

本シンポジウムでは、若手委員会の活動紹介を行い、小児保健の魅力およびその発信方法について検討した。シンポジウムの聴衆は、多職種連携や学際的なアプローチで子どもと家族の健康を支えることが小児保健の魅力だと捉えていた。若手委員会で実施した会員ニーズ調査の結果や本シンポジウムで得ることができた協会員の意見は、小児保健の魅力やその発信方法に関する有益な情報であり、これらを踏まえて小児保健の魅力が社会へ発信できるような手立てをこれから創出したい。

また、これまで若手委員会は 4 つの目的のもと活動を展開してきた。今後も小児保健上の課題解決のために取り組むと同時に、若手会員の獲得・育成に向けて取り組みを継続していきたいと思う。さまざまな世代の会員とともに若手委員会は本協会の魅力を社会へ発信し、協会活動の更なる活性化・小児保健の魅力を未来へつなげる取り組みを継続し、将来の子どもや家族の健康を支える重要な役割を果たしていきたいと思う。

本報告に関して、開示すべき COI はありません。

文 献

- 1) 前林英貴. 医療的ケア児の現状と課題～10年後を見据えて～ 人口減少地域における医療的ケア 現状と未来. 小児保健研究 2021; 80(3): 312-315.
- 2) 三浦清邦. 医療的ケア児の現状と課題～10年後を見据えて～ パーソナルアシスタンス (個別の支援) を目指して. 小児保健研究 2021; 80(3): 316-319.
- 3) 橋本鈴世. 医療的ケア児の現状と課題～10年後を見据えて～ イタリアにおけるインクルーシブ教育 現状と課題. 小児保健研究 2021; 80(3): 307-311.
- 4) 津田聡子. 性教育の多様性～ミライはどうなっている?～ インドネシアの性に関する教育 「多様性の中の統一」の中で. 小児保健研究 2021; 80(講演集): 107.
- 5) 桑江喜代子. 性教育の多様性～ミライはどうなっている?～ 沖縄県における思春期性教育の現状と課題 スマホ社会, 若者の望まない妊娠と性感染症をめぐって. 小児保健研究 2021; 80(講演集): 108.
- 6) Alexander R. 性教育の多様性～ミライはどうなっている?～ これからの「性」との向き合い方 平和学の視点から. 小児保健研究 2021; 80(講演集): 106.
- 7) 矢野浩二郎. コロナ禍における ICT を活用した先進的な取り組み コロナ禍およびアフターコロナを乗り越えるための VR 技術の活用について. 小児保健研究 2021; 80(講演集): 104.
- 8) 北島康司. コロナ禍における ICT を活用した先進的な取り組み NICU におけるオンライン面会システムの導入とその未来. 小児保健研究 2021; 80(講演集): 101.
- 9) 三浦真澄. コロナ禍における ICT を活用した先進的な取り組み 鳥取大学医学部附属病院 NICU・GCU の面会支援. 小児保健研究 2021; 80(講演集): 100.
- 10) 三浦絵莉子, 大久保香織, 岡崎 桂, 他. コロナ禍における ICT を活用した先進的な取り組み 小児病棟における ICT を用いたきょうだい支援. 小児保健研究 2021; 80(講演集): 105.
- 11) 今井雄一郎. コロナ禍における ICT を活用した先進的な取り組み 地方公立病院の COVID-19 診療における遠隔診療・家族支援. 小児保健研究 2021; 80(講演集): 103.
- 12) 中塚幹也. ミライに生きる子どもたちへの包括的性教育～セクシュアル・マイノリティの現状を踏まえて～ トランスジェンダーの子どもへの二次性徴・ライフプランなどへの支援のための医療と教育の連携. 小児保健研究 2022; 81(講演集): 123.
- 13) 佐々木掌子. ミライに生きる子どもたちへの包括的性教育～セクシュアル・マイノリティの現状を踏まえて～ 子どものセクシュアル・マイノリティについての基本的な考え方. 小児保健研究 2022; 81(講演集): 122.
- 14) 葛西真記子. ミライに生きる子どもたちへの包括的性教育～セクシュアル・マイノリティの現状を踏まえて～ 教育現場を SAFE ZONE に! 小児保健研究 2022; 81(講演集): 124.